

スライド1

皆様、こんにちは。倉石知恵美と申します。よろしくお願いたします。今日は、おれんじあさおの取組ということで事例報告をさせていただきます。私たちの取組を発表させていただく場を作っていただいております。感謝いたします。

スライド2

まず、おれんじあさおという団体ですけれども地域づくりの団体です。地域づくりの地域共生団体。発足は2023年の2月、ちょうど丸3年です。

目的ですが、「認知症に対する様々な偏見をなくし『共生』する社会の実現を目指す」。これを目的としております。事業名称は（認知症）共生ひろばとありますが、このカッコ認知症というのは、認知症を今は切り口としていますが、認知症だけではない、地域には多くの方がいます。いろんな方がいます。多様性、LGBTQ、私たちもいろいろ関わらせていただきました。ひとり親。全ての地域の人たちが自分の地域で暮らしやすい、そんなまちづくりを目指しております。

スライド3

さあ、ここで地域社会。世の中の現状。先ほどもずっとお話をしておりましたが、誰もがなりうる認知症なんです。高齢化の進展とか、MCI、これらを含めた認知症の数というのは3人に1人という時代。決して他人事ではないんです。我が事として捉えていただきたい。今こそ認知症の正しい理解が必要なんです。我が事、自分事と捉えることが重要です。今日、この会場にいる皆さんも、他人事だと思わず自分事。そして企業の団体の方々、自分たちの職場のみなさんにも自分事なんだよということを持ち帰っていただければと思います。だからこそ、もっと知ってほしいんです。知ることで、豊かな暮らしとか思いやりのある地域づくりにつながります。もちろん、この企業の方との連携というのは豊かな暮らしにつながるということを、前半のお話を聞いて私も実感しております。

スライド4

そして、ここで「新しい認知症観」という言葉を出しましたが、認知症の法律ができましたよね。認知症基本法というのは皆さん聞いたことはあると思います。でもこれ、正式名称ではないんですよ。正式名称は「共生社会の実現を推進するための認知症基本法」、これが正式名称です。共生社会という言葉が真っ先に入っています。認知症の基本法、認知症の法律というのは共に生きる共生社会、これが一番大事になってきます。

で、一番重点の目標になっていて、皆さんに訴えていることが新しい認知症観。この言葉って、皆さん聞いたことはもう既にあると思うんですけれども、ここをしっかりと今日は持ち帰っていただきたいと思っています。これ、本文そのまま読みますが、新しい認知症観というのは、「認知症になったら何もできなくなるのではなくて、認知症になってからも、一人

一人が個人としてできること・やりたいことがあり、住み慣れた地域で仲間とつながりながら希望をもって自分らしく暮らし続けることができる。」という考え方のことです。

でも皆さん、新しい認知症観、言葉は聞いた。よし、わかった。じゃあ具体的にどんなこと？

スライド5

ちょっと今日は見える化をしてきました。古い文化です。古い認知症観。でも、この新しい認知症観、ニューカルチャーです。オールドカルチャーの方が多いんです。実際に地域の中、社会の中、特に高齢の方とかは、この古い文化の価値観を持っている方が大勢います。つまり偏見なんですよ。新しい認知症観っていうのは、地域の偏見をなくす。そして、こういう新しい認知症観を持った社会観に変えていかなければ、認知症の人の暮らしって変わらないんですよ。認知症の当事者の方からの声も聞きます。いろんな施策が出ます。2019年には、認知症施策推進大綱というのでも出ました。国の施策はいろいろ出てるんですけども、なぜ認知症の人の暮らしって変わらないの？なぜ社会が変わらないの？もっと変わって！新しい認知症観の意識を皆さんが持って！こういう想いでこの法律は出来たんです。認知症は自分事であるとか、分かる事がたくさんある。認知症の人でも仕事ができる。認知症の人でも自分らしく暮らし続けられる。諦めず、楽しく希望もあるんだということ。認知症観が古いままだと、互いに楽にはなれないんです。でも、これは介護の現場の方も、まだ古い認知症観を持っている方がいます。ですから、私たちはこういう場でこう発信をしていくことはすごく大事なことだと思っております。

スライド6

さあ、新しい認知症観を心に持っていただいた皆様に、私たちの活動の事例を発表したいと思います。まず、ロバの日という買い物ツアーのことをお伝えします。これはイトーヨーカドー新百合ヶ丘店さんとの共同企画なんですけれども、毎月一度、第2水曜日にヨーカドーさんに行ってお買い物をしています。でも、いきなりこれが実現できたわけではなくて、イトーヨーカドーさんの職員向けに認知症の講座を何回もやりました。何年もやりました。そして8割以上の方がサポーターとなって、サポーターの養成講座というのは座学ですから、こうやって勉強するだけですが、リアルにお客さんの前で一緒に対応してみるということをイトーヨーカドーさんの職員さんからもやりましょうという話をもらったので、じゃあ是非ということで、これが実現しました。もう30回ぐらい続いています。これは、イトーヨーカドーさんの職員さんのためにもなるし、参加する利用者さん、そしてそれを支えるサポーターの皆さんのためにもなる。夢が実現できるということですよ。生き生きと暮らすところにつながっています。

スライド7

そして、活動事例の二つ目。これは「働く場」ということで、パルシステムさんとのつなぎ

なんですが、ここも何度も講座をさせていただきました。全職員さんというか、ドライバーさん向けのとき、事務員さん向けのとき、あとは配送係とか、ちょっといろんな荷物を持つ係の人とか、対象によって講座の内容を少し変えたりとかしました。ドライバーさん向けだと、ドライバーをしているときの社会の変化に気付くとか、そういうことも皆さん理解をしていただきました。こういうことを企業さんが学んだ上で対応方法を身に付けていただいで何が良かったかというのは、働ける仲間を増やせるということです。若年性認知症の方の対応方法、一緒にコーディネーターの方も来ていただいて、今日も来ていただいでますけれども、一緒に説明したりとか、講座の話を見せていただいて、対応方法を身に付けていただきました。そうしたらやっぱり当事者も働けるんですよ。企業の一員になれるんですよ。そういう仲間を増やせた、ということにも結びつくと思います。

スライド8

それから、モニター。大手食品メーカーさんの地域活動というか、私たちがやっている認知症カフェに参加をしてくれている方がいるんですけども、何が良いかというと、やっぱり生の声を聞けるんですよ。認知症のある暮らしの便利グッズの開発、ハテナ、とありますが、まだ開発までは行ってないですけども、カフェに参加して、御家族とか当事者とか支援者、専門職たちの話を生で聞くことによって、暮らしのヒントの言葉を拾ってもらってるんですよ。例えば、コップの取っ手とか、鍋の蓋って半分透けてると分かるけど、透けてないと何を作ってるか分からないよねとか。音が出るとか、分かるように工夫されている商品があるといいなというのを、アンケートではなくて生の声を拾ってもらえているっていうのはすごいなと思っております。

スライド9

それから企業カフェ。これは本当に今日来られている企業の皆さんに実現してほしいと思っているんですけども、認知症の講座を開くと、社員のお悩み相談とか気持ちの共有とかができるんですよ。皆さん企業の社員なんですけれども、家に帰れば地域住民の一人なんです。皆さん個人ですから、やっぱり家に帰ったり、地元に戻ったら一人なんです。住民なんですよ。だからこそ、介護のお悩みとか抱えている社員さんもいらっしゃるかもしれません。これはあの、ZOOM だったんですけども、130名ぐらいの企業さんと一緒にやりとりをしたときに、親の介護でどこに相談をしていいか分からなかったとか、企業では優秀な営業マンさんなんですけれども、具体的な話、地域包括支援センターという言葉すら知らなかったとか。でも、こういうカフェって定期的にはやってないですけども、もし皆さんが自分たちの企業でできるとしたら、定期的にこういう企業カフェをやることによって社員さんの悩みを聞くこともできますし、私たちとつながることができたら、当事者の声とか家族の声を生で聞くこともできます。仕事にも集中して退職しないで済むんじゃないかとも思います。

スライド 10

ちょっと振り返ってみませんか。職場で親の様子が気になって集中できない社員さんっていませんか。店舗で困っている高齢者にどう声掛けていいかわからないスタッフっていませんか？今日は、区長さんもいらっしゃってますし、市長さんもいらっしゃってますし、トップに立ってる人たち、自分たちの仲間の人たちの健康だけではなくて、こういう背景、家庭の背景とかも共有できたら、今の社会が良い社会になるんじゃないかな。良い企業継続、良い社員継続、退職しなくて済むんじゃないかなとか、本当に切に思います。

スライド 11

そうです、このとおり支援の種って既にあるんですよ。今日ここに来てらっしゃる皆さんは地域資源そのものだと思っています。地域とタッグを組むことで支援につながると思いますが。家族会とか当事者の声、これはつまり社員の声でもあります。企業と地域がネットワークをつないで、住みよい地域づくりを共に目指していけたらなって、私たちも、この団体の一員である私も思っております。

スライド 12

共生社会。認知症基本法ではありませんが、共生社会の実現に向けて、認知症にやさしい社会って、結果的に全ての人にやさしくなると思っています。そんな社会になります。自分たちが所属している企業がやさしい社会づくりにつながっている、そんなことを作っていくなんてことを発見できたら、何て素敵なことだろうなって思います。

スライド 13

そして、ちょっと知って得する地域の動き。今日ここに来られている皆さんは御存知か御存知じゃないかちょっと分かりませんが、認知症のキャラバン公式キャラクターロバ隊長というのがいます。私も今日着けてますが、これロバ隊長なんですけれども。ちょっと読みますね。認知症の人が自分らしく暮らし続けることができる社会の実現を目指した国の取組、「認知症サポーター養成講座」を受講した方が、その証としてもらえるサポーターカード。川崎市内ではカードと一緒にキャラクターである「ロバ隊長」のマスコットも配布しています。国の施策である認知症の普及啓発を地域住民が担っています。その一助として活躍しているのが「ロバ君倶楽部」です。認知症になっても安心して暮らせるまちづくりをロバのように一步一步着実に進んでいきます、という想いでこのロバ隊長はいます。今、川崎市内に7区全ての区でロバ君倶楽部が誕生しています。全部で20か所ぐらいはあると思います。こういうことも、地域の方は知ってるんですけど、企業の方って多分知ったら得な情報だなと思いますので、持ち帰っていただければなと思います。

スライド 14

是非、地域とコラボしてネットワークを広げませんか。地域資源である企業の皆さんと何か一緒にできることはないでしょうかということで、今日は発表を終わりますけれども、認知症カフェに来られている企業マンの方の言葉を私はちょっと最後に持ってきました。「AIがいくら進化したからといっても、インターネットにつながっていない現場ならではの情報って山ほどある。企業として、そういった机上のデータだけでは見えてなかった課題、それを見つけ、その解決に自社の技術、資源が活用できるということにつながればWin-Winなのだと思っている。」、そのとおりだなと思って、今日は皆さんに紹介をさせていただきました。そして今日は最後にロバ隊長をたくさん持ってきたんです。地域の方が作ってくれたロバ隊長を、もし企業の皆さん、今日ここにいらっしゃる皆様が何かできるときに見本がないと困るだろうなと思ったので、是非お帰りの時には一つずつお持ちいただければと思います。御清聴ありがとうございました。